

幾日までも蒔ぬ種故先便薄々申入候通去月より毎夜為取懸居候

当年中ニハ少しハ駿も見得可申候猶模様後して報告可致候於す

みも又少し文章之手際出来候様ニ候次之便ニ為認遣可申候○水

晶之ホタン一條ヲ被送候由折角価之義申遣置候得共更ニ不申来

当夏馬場練兵鳥渡下り登之節一条へ聞合之事頼談候処代ハ今頃

と申居候由彼ハ貫たる品杯と而之事欵ハしらねとも唯貫ふも氣

之毒故右周旋方鍵忠へ申遣候得とも是も又尔今ニ無報答之薄々

承候得は五円位之ものよし右ニ相当之産物ニ而も遣度候得共

存之通何も可遣品も無之実ニ込居候不得止節ハ五円押付遣可申

と考居候一条へ之挨拶之事致承知候右返事斯延引相成候次第ハ

当年ハ鶯宿へ御祖母様御湯治御見舞かてらお多代ニ交代致候処

折悪引風して三四日浴湯を扣候故猶一廻り入湯候様折角之御意

難黙止跡ニ残り去月廿三日帰着候処留主中之用向打嵩居取片付

繁雜昼短日にして事ハ残り夜ハ老眼何分筆取事難儀一日々々と

送り終に今日ニ至申訳無之然ニ昨日は九月七日第十号日教五十七日今

日ハ八月廿五日附第九号九月廿三日附第十一号と両日ニ三通相

達は又取束之返書ニ相成候博覧会见物之模様明細ニ記載大慶不

過之候昨夜八時頃帰宅不取敢開封候処明細記故御か々様ヲ初皆

々打寄詠為聞候処文体も骨折候故御女生様ニも御退屈なく御聞

上時を移し十一時過迄相懸り皆羨やう唱いたし候唯我等ハ外国

諸州之事ハ更々不心得故此州ハ斯之風彼処ハケ様之様子と訳し

て為被分申事ハ不出来如何ともする不能甚残念也山本にても相

手にして承らハ少しハ様子も知れ可申然し一通ハ誰も訳る故大

悦楽ニ相成候猶後号を熟讀候ハ々又々一層之楽と存候那珂氏

21 明治9年11月3日 菊池長閑

第十号十一月三日記

第八号八月六日附十月四日相達日教六毎度女兒共之義心配尤ニ

候おすみは兎も角も当分之用達し位ハ可出来お磯始外女兒共中

々我等之世話ニ而ハ貴様達之廻ふ様ニハ引届間敷乍去捨置けハ

エ為見候義承知候察之通新聞エ掲載故態々遣し迄も及申間敷
と被考候得共文体ハ女兒も詠るよふニ福沢之国尺様ニ候得は先
生却而取るかもしられす得と考て取計可申候○宅命義黒田弁理

某へ随行朝鮮国へ出張尽力ニ付縮面代八十円為被賞拜賜之よし
ニ而卅円宿元へ遣来候旨宮古ガ申来候享義先頃出県之砌中山ニ
而写真為取其内一枚貴様遣度とて一封認置候此度遣し候

藤田も漸々去月十三日ニ松前福山へ着候よし函館ハ峰岩白雪敷
綿入重也福山ハ不然少暖なるよし此地も岩峰及び其続岩岸ニ雪
降候然し昨今ハ少しハ暖ニ成好晴も続候遊老ハ巨籠を始候得共
御祖母様未だ御初不被成毎月仙北町虚無蔵八幡宮天神エ御参詣
被遊候是皆貴様無事帰朝を御念願也

熊本県下何かモヤクヤある風説出候虚実甚不分明也当県ハ至而
静謐也米価大下落候ハ田地家大迷惑のミ也

七月之試験目賀田氏ト文部省へ報告有之貴様齋藤氏専ら評判宜
敷ニ付兩人分抜抄此間那珂ガ申来満悦致居候就中齋藤ハ若と之
事可恐也弥以出精齋藤之右ニ出候様祈望いたし候

武夫殿

長閑

尚以第七号七月初旬ニ差出欵ニ申越候得共尔今不達候覚違ニ有
之間敷哉為念遣候

御祖母様御湯治御相応ニ而御帰り也当年浴客至而少く我等残り
候処相長屋之者引取隔二間明キ他長やエも皆百姓計ニ而往て語
人もなく又来る客もなく夜ハ単と同居也誠淋敷候向山之紅葉例

之通錦を織なし春ならハ花そむかしの□□に思□るるとも可申
事也

(封筒裏)

「亞米利加国ポストン府

ボードウイン、ストリート

二十二番地

菊池 武 夫 殿

返書報平安

(封筒裏)

「大日本陸中国岩手県盛岡

第一大区五小区加賀野

八十六番地

菊池 長 閑

十一月三日発